

ネットカフェ調査の特徴とまとめ

2007年4月27日

全国青年雇用大集会実行委員会

行動の概要

全国青年雇用大集会実行委員会では、「まともに生活できる仕事を」「人間らしく働きたい」をスローガンに開催する集会にむけて、全国で青年の働く実態を告発し、社会的に明らかにしていくために、最低賃金生活、残業代未払い一掃宣伝とあわせて、ネットカフェ調査をおこなうことを全国に呼びかけました。

調査は、首都圏を中心に、宮城、愛知、奈良、大阪、兵庫、福岡の19地域、34店舗で調査をおこない、76%にあたる26店舗で、長期滞在の利用者がいるという回答を得ました。また、首都圏だけでなく、宮城、愛知、奈良、大阪、福岡など、全国に長期滞在者が広がっていることも、今回の調査で明らかになりました。

駅周辺の店舗を調査した地域では、蒲田駅で5店中4店、溝の口駅で3店すべて、川崎駅の4店中3店、亀有駅の2店すべてなど、回答を得た店舗の大半でいわゆる「常連さん」がいることが分かりました。

利用者の方への聞き取り数は84、アンケート回答数は37です。アンケートを避けるように入店される方も多く、直接の聞き取りには困難がありました。「親にはアパートに住んでいると知っている」と話す方がいるなど、自分の努力や能力が不足しているから、困難な生活を人に話したくない、知られたくないという思いがあることを感じています。

調査結果から見えてきたもの

今回のネットカフェ調査は、「ネットカフェ難民」がマスコミや国会で社会的問題として取り上げられるなかで、青年の貧困の実態を全国規模で明らかにしようとおこなったものです。

しかし、調査結果からは、ネットカフェが、「貧困」とともに、青年の仕事と生活の困難さの縮図ともいえる状況にあることが明らかになりました。

1. 青年の貧困が予想以上に広がっている

一つ目の特徴は、お金がなくてアパートなどを借りられない。その状況から抜け出せない状況があるということです。従業員への調査では、全国のネットカフェで10人、20人という規模の「常連さん」（長期滞在する利用者）がいるという回答を得ました。

利用される方への聞き取りでは、「会社をクビになり、ネットカフェ暮らしをはじめた友人がいる」（千葉）、「仕事をやめて2年近くネットカフェに住んでいる」（蒲田）などの実態が出されました。【ケース1】

求人が多くが非正規雇用となり、安定した収入が得にくい状況のもとで、失業などをきっかけに人間らしい生活を奪われる可能性が、多くの青年にとって現実の問題となっています。

また、「自己責任論」が広がるなかで、行政や政治によるサポートが受けられないことが、青年がこうした生活から抜け出すことを困難にしています。

2. 非人間的な働きかたが見えてきた

一方で、スーツ姿の労働者が多数宿泊しているという調査もありました。「夜はいつも満席。スーツをした人が半分。仕事している人や、毎日来ている人もいる」(大阪)、「今日の昼に緊急に出張を言い渡され、宿泊にネットカフェを使っている」(愛知)など、仕事が忙しくて家に帰れない、急な出張などで泊まらざるをえないといった青年が多数ネットカフェを利用していることも分かりました。【ケース2】

野放しの「サービス残業」などの違法、人員削減、成果主義による締め付けなど、青年をモノのようにあつかう企業や職場の現実が、ネットカフェを通して見えてきました。これは、私たち自身、予想していなかったことでした。

3. 社会の中に青年の居場所がない

加えて、フリーターなど不安定で低賃金の働き方をしている青年や、仕事がない青年にとって、社会や家庭の中に居場所もちにくいという状況があるもわかりました。

「月収8万円。家に帰ると親に『なにしとったんや』といわれるので、ネットカフェによく泊まる」(奈良)「月収3万円。父親がいらいらしていることが多く、家に居づらい。将来、今の家に住みつづけられるか不安」(埼玉)などの声が多くきかれました。【ケース3】

青年の貧困と仕事問題の解決のために

仕事と貧困の問題は、個人の努力だけで解決できる問題ではないと考えます。そして、政治・行政などが、本来果たすべき役割をしっかりと果たすべきだと思います。

厚生労働省は、ネットカフェ調査をおこなうとしています。それ自体は重要なことだと思いますが、いま求められているのは、青年の貧困と仕事の問題を解決する具体的な政策であり、青年へのサポートです。

1. 青年の貧困を解決していくために、正規雇用を増やすこと、世界でも最低クラスの最低賃金を時給1000円に引き上げ、青年向けの家賃補助などを、行政に求めていきたいと思えます。

2. 青年をモノのようにあつかう非人間的な働かせ方を変えるためには、正社員を大幅に減らし非正規労働に置き換えて、世界でも異常な長時間労働やサービス残業を野放しにし

てきた、企業と政府の態度をかえることが欠かせないと思います。

3. 青年の居場所については、解決は簡単ではないと思いますが、すくなくとも、無償の就業支援など仕事を求める青年へのサポート、青年の中での仲間や人間的連帯をつくりくみへのサポートを、政治や行政がもっとおこなう必要があると思います。

私たちは、5月20日の集会で、青年の切実な願いをすべて集めて集会を開きます。ネットカフェに集まっている方にも、ぜひ集会にあつまって、青年の仕事と貧困の問題を解決のためにいっしょに力をあわせたいと思います。

ケース紹介

【ケース1】

ある男性は、以前勤めていた会社の後輩がネットカフェカフェ暮らしをしていると話してくれた。後輩は20代後半で、会社をクビになり、家賃が払えなくなりアパートを追い出された。いまは派遣でガードマンや工事現場などで働いている。最初は友だちの家を点々としていたが、居づらくなって漫画喫茶に寝泊りするようになった。ギャンブルなどをしているわけでもなく、『何とかお金をためたい』とがんばっているが、一向にお金がたまらないそうだ。男性は、「彼がこれからどうやって今の状況を抜け出すのか、想像がつかない。ずっとこういう生活をしていくんですかね。いまの世の中っておかしいですよ」と話していた。(千葉・津田沼駅前、30代男性)

【ケース2】

渋谷のネットカフェ前で対話をした青年。飲食店で2年間、正社員として働いており、仕事は朝8時から夜11時までで、帰ると寝る時間がなくなるので週に6日は職場近くのネットカフェに泊り、日曜日だけ家に帰る生活をしている。仕事以外はなににもできない生活を続けるなかで、以前はお金もうけを追求していたけど、いまは当たり前の生活ができることが幸せなんだと思うようになった。(東京・渋谷、20代男性)

【ケース3】

「ネットカフェには、週3日ぐらい泊まる。ゲームをしている」という青年。詳しく聞くと、父子家庭で生活保護をうけており、本人は中学卒業後、しばらく仕事もしていなかったが、一年ぐらい前から、解体作業の手伝いなどをするようになった。でもその仕事も、週1～2回、月3万円にしかならない。「家には、ゲームもなく、お父さんもイライラしていることが多くて居づらい」とネットカフェに来ていることがわかった。「将来、このまま、今の家に住み続けられるのか不安」と話していた。(埼玉・蕨駅前、24歳男性)